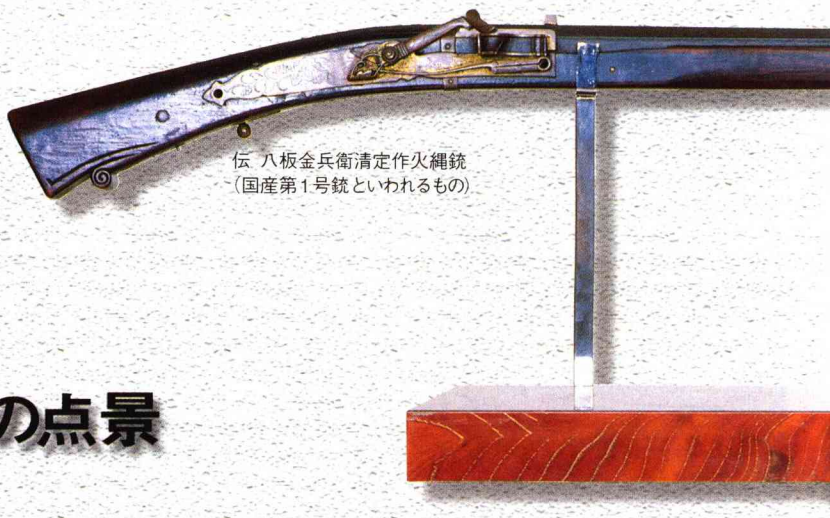
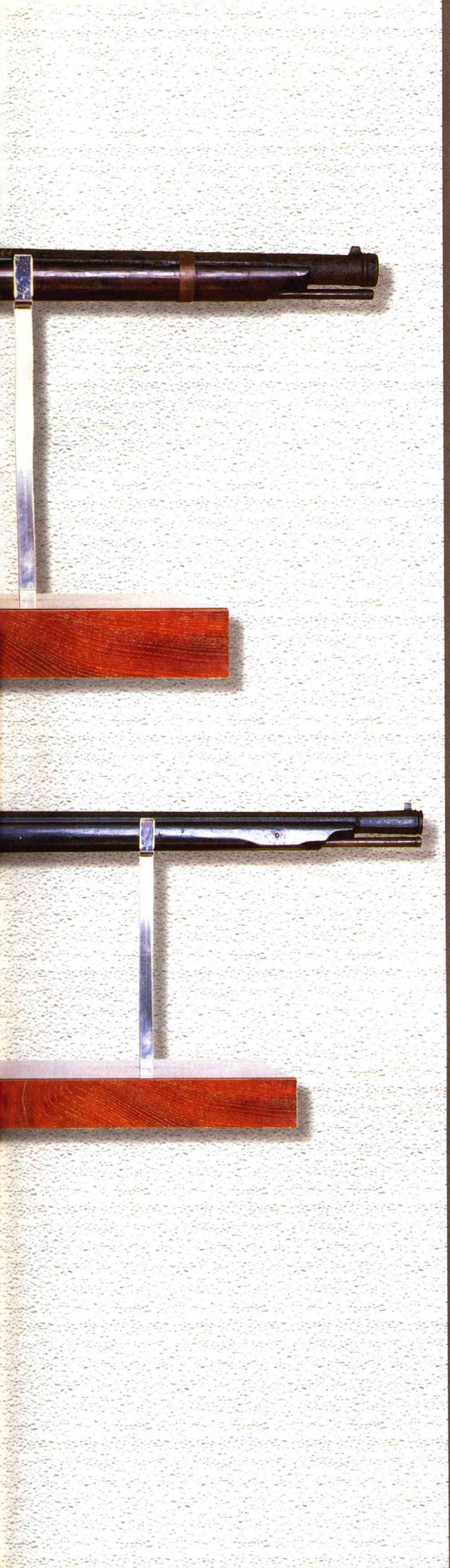
ポルトガル初伝銃
(ポルトガルから最初に
伝わったといわれるもの)



伝 八板金兵衛清定作火縄銃
(国産第1号銃といわれるもの)

Steel Landscape 鉄の点景

天正2年 (1574年)、最強といわれた1万5千の武田騎馬隊は、織田・徳川の連合軍の前にわずか6騎を残して壊滅したといわれる。世にいう長篠の合戦である。この戦で猛威をふるったのが、信長が堺の商人から手に入れたといわれる3千丁の鉄砲である。長篠を機に戦の様式が大きく変わったといわれるが、そうした時代の変化の裏側には、技術にたずさわる者の苦闘があった。種子島に伝わった鉄砲が国産に成功するまでのエピソードを、その実物写真とともに、しばしご賞翫の程。



時代を変えた鉄

種子島

鉄砲づくりの鍵になった「ねじ」のノウハウ

刀鍛冶師・八板金兵衛は、頭を抱えていた。目の前には領主・種子島時堯が南蛮人から金二千両で買い受けたという鉄砲がある。製造の秘法を会得すべしとの命を受けたものの、どうしても分からないのだ。いったいどうすれば鉄筒の底をふさいでいるこの不思議なからくりを形にすることができるのか。

伝え聞くところによれば、南蛮人たちは、この鉄砲を使って26羽もの鳥を立て続けに撃ち落としたという。寸分の狂いもない鉄筒でなければ、それほどの正確さは望めない。刀しかつくったことのない金兵衛たちにとって筒の製法は、まったく未知の領域だった。しかし筒については軸となる真金のまわりに平らな瓦金を叩いて鍛えるという方法で、苦心の末になんとか同じものをつくることに成功していた。

だが……。どうしても分からないのは、筒の底をふさぐ技術だった。

南蛮の銃には筒底の内側と栓とに凸と凹に噛み合う螺旋の溝が掘ってあり、回し込んで底をふさぐようになっていた。今でいう「ねじ」である。だが、この溝を切り込む方法がどうしても分からないのだった。

しかたなく金兵衛たちは底を焼きしめてふさいではみたのだが、この鉄砲は撃つうちに火薬のカスがたまり、やたらに暴発を起こした。「ねじ」の栓は、ときおり外して筒を掃除するためには、どうしても必要な装置だったのだ。南蛮船でやってきたポルトガル人たちの中には、撃ち方は知っていてもつくり方を知る者はなく、金兵衛の悩みが解決されることはなかった。

ついに金兵衛は、決心をした。秘法のためには、娘の若狭を南蛮船の船長に嫁がせ、南蛮の地より技術者を連れてこさせるしかない。——こうして17歳の娘、若狭は自らの身を挺し、見知らぬ南蛮船に乗って種子島を後にすることとなった。そして翌年、父の悲願に応え、彼の地より鉄砲鍛冶を連れて帰ってきたという。金兵衛たちは、この鍛冶師に底をふさぐ技術を習い、ようやく国産第一号銃が完成した。

金兵衛父娘の話は、伝承としては残っているものの主要な史料にはその記載はなく、わずかに矢板家の家系図に出てくるのみなのだが、この逸話によるかぎり、鉄砲の伝来は同時に

「ねじ」の伝来でもあったことが推論できる。現代を支える巨大な鉄の文明は、ボルト・ナットに代表される「ねじ」の技術なしでは成立しえないが、どうやらこの時、鉄砲とともに「ねじ」のノウハウも伝えられたらしいということが分かる。また、日本人として初めて欧州の地に足を踏み入れ、重要な技術を伝える役割を果たしたのがうら若きひとりの女性であったといわれていることも興味深い。

歴史を伝えた技術者の存在

歴史の教科書にも書かれているように、鉄砲を持ったポルトガル人が初めて種子島に漂着したのは、天文年間／西暦1543年であったとされている（欧州側史料では1542年）。領主・種子島時尭は轟音を発する不思議な飛び道具の威力に驚き、二挺を買取ったという。そして火薬の製法を篠川小四郎に習わせるとともに、刀鍛冶の頭領・八板金兵衛には自らの手で同じ鉄砲をつくり上げてみるよう命ずる。だが、鉄砲そのものの製法を知る技術者は南蛮船の一行の中にはおらず、鍵となる「ねじ」の製法がどうしても分からなかった。

思案する時尭らの元に、技術者の乗った貿易船が着いたのは、翌年のことだったと史料は伝えている。金兵衛らはこの機をのがすまじと、鉄砲の製法を修得し、わずか一年にして数十挺を製作することに成功した。この技術がやがて紀州や堺に伝えられ、多数の鉄砲鍛冶が生れ、大量生産へと結び付いていったというのが、旧来からの定説である。

近年の歴史研究の中には、こうした一元論的な鉄砲伝来説に疑問を呈する見方もある。私貿易をしながらしばしば海賊行為も働いた船の民、つまり倭冦（わこう）が種子島以前から大陸等を経由して鉄砲を知っていたことが史料からも分かっているが、この倭冦による無数の交易行為が鉄砲を伝えるうえでの媒体になったのではないかというのが反論の主たるものである。この歴史観をとるなら種子島のストーリーは、そうした無数にある伝来秘話の中にあってひときわドラマチックなもののひとつであるにすぎない。どちらの説が事実に近いのかは、現状ではまだ明確には断定できないようである。

ただいえるのは、歴史の変わり目に八板金兵衛のような熱心な技術者たちが存在し、暗中模索を繰り返しながら、時代を次へと渡したということである。そのことだけは疑うべくもないだろう。現代を担う技術者の中にも、時代の画期をみつめている人々がきっといるはずである。現代の金兵衛たちは、はたして何を見つけ、そして超えようとしているのだろうか。その苦闘の中から時代を解く技術が見出だされることを切に願いたい。

［取材・写真協力：種子島開発総合センター］

種子島開発総合センター／鉄砲館

ポルトガル初伝銃、伝 八板金兵衛清定作火縄銃をはじめ、国内外のめずらしい古銃約100丁を展示する。ユニークなデザインは南蛮船を模したもの。
鉄砲展示室と郷土資料室からなり、鉄砲と歴史はもとより種子島の民俗、美術工芸などについても見ることができる。鍛冶と製鉄についての資料、種子島家に関する資料などもある。
休館日は7月、8月をのぞく毎月25日と12月29日～1月1日の期間のみ。

鹿児島県西之表市西之表7585番地
TEL09972-3-3215
西之表港から徒歩10分
種子島空港からバス45分